

2019 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	教授	藤沢 真理子
最終学歴	学 位	専 門 分 野
大阪府立大学大学院社会福祉学研究科 博士後期課程修了	博士	社会福祉学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

建学の精神である「真に信頼して事を任せうる人格の育成」を目指し、授業を実施する。

(計画)

2019 年度前期は「社会福祉援助技術論」、「児童家庭福祉論」、「基礎演習Ⅰ」、「専門演習Ⅰ」、「専門演習Ⅲ」を担当する。それぞれの授業の中で、「オンリーワンを一人にひとつ」獲得できるように、学生が自分であればどのように対応するか、事例を使って考えるプログラムにする。後期の「人間と地域」、「地域福祉論」、「社会福祉概論」「基礎演習Ⅱ」「専門演習Ⅱ」「専門演習Ⅳ」においても同様の目的をもち、とくに、「人間と地域」では防災という視点から学生自身やそれぞれの家族の命を守るためにどうすべきか、考えるプログラムとする。

○担当科目（前期・後期）

(前期)

児童家庭福祉、社会福祉援助技術論、基礎演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

(後期)

社会福祉概論、人間と地域、地域福祉論、基礎演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

「児童家庭福祉論」「社会福祉概論」「地域福祉論」など 100 名前後の大きなクラスではグループワークを実施することは難しいが、2019 年度は創意工夫し、ディスカッションおよびグループワークを取り入れた。学生たちからはグループワーク等で幅広い視点を学ぶことができたと高く評価された。カリキュラム変更で今年度最後となる「人間と地域」は 2 年生以上しか履修できなかったため受講者 30 名と少なかったが、その分一人一人の学生に合わせて授業できた。

○作成した教科書・教材

講義内容に即したパワーポイント資料や動画を作成し、その時間のテーマが学生に理解しやすいように工夫した。

○自己評価

学生たちが「オンリーワンを一人にひとつ」獲得できるように、授業展開していった。今年度は愛知東邦大学で教え始めて 3 年目となり、学生が何を望んでいるのか理解でき、授業評価は「人間と地域」で 94% となり、学生から将来に役立つ授業と高く評価された。とくに、「人間と地域」は教科書を使用せず、オリジナルな内容で実施しており、毎年学生のニーズに合うように工夫している。学生が積極的に授業に参加し、学生自身も最初はグループワークに戸惑いがあったようだが、次第に慣れてきて、グループワークの面白さがわかったという評価が多かった。福祉関係の科目「社会福祉援助技術論」「社会福祉概論」「地域福祉論」「児童家庭福祉論」はテキストを使用し、人間健康学部の学生が理解しやすい内容としている。これらの科目についても学生たちが望んでいること

がわかってきたので授業満足度が89%～76%となっている。次年度はさらに学生たちが福祉について興味・関心をもってもらえるように、授業内容を工夫していきたい。

専門演習では、4年生も3年生も「防災・減災」をテーマとしており、将来、社会で役立つような防災・減災の知識とスキルを獲得できるプログラムを考えた。その結果、ゼミ生の中から人間健康学部初めての学生防災士2名が合格した。人間健康学部では消防や警察や自衛隊など専門職の育成を一つの目的としているが、今年度ゼミ生が試験に合格し、防災士の資格を持った警察官が誕生する。また、4年ゼミ生はボランティアとして、2019年度名東区民祭りの認知症サポーター養成講座ならびにGPSを使った徘徊高齢者お帰り支援事業に参加し、その活躍が大学ホームページや『邦苑』に掲載された。

基礎演習については、山村先生と一緒に担当し、11人の基礎演習担当の教員がスムーズに演習活動を実施できるように一年間運営した。藤沢は昨年度も担当していたので、昨年度の反省を活かし、スポーツ大会やプレゼンテーションの方法などを工夫し、学生から充実していたと評価が高かった。

II 研究活動

○研究課題

コミュニティにおいて、避難行動要支援者をどのように支援するか、その仕組みを研究する

○目標・計画

(目標)

「オンリーワンを、一人に、ひとつ」を目指し、防災福祉学について独自の研究を進める。

(計画)

大阪府における避難行動要支援者支援の実践をもとに、名古屋市における避難行動要支援者支援の課題を明らかにし、その課題を克服するためにはコミュニティにおいてどのような仕組みを構築すればよいか調査研究を行う。

○2012年4月から2020年3月の研究業績（特許等を含む）

(著書)

(学術論文)

- ・藤沢真理子「賀川豊彦とコープこうべ～阪神淡路大震災を中心として～」『東邦学誌』第48巻第2号、2019年12月、33～50頁。
- ・藤沢真理子「賀川豊彦と東京帝国大学セツルメント」『東邦学誌』第48巻第1号、2019年6月、15～35頁。
- ・藤沢真理子「賀川豊彦と関東大震災～100年続く復興支援～」『東邦学誌』第47巻第2号、2018年12月、15～32頁。
- ・藤沢真理子「児童福祉に貢献した女性たち～賀川ハルと村岡花子～」『東邦学誌』第47巻第1号、2018年6月、1～17頁。
- ・藤沢真理子「防災福祉コミュニティと避難行動要支援者支援」『東邦学誌』第46巻第2号、2017年12月、27～46頁

(学会発表)

(特許)

(その他)

- ・招待講演（第1回賀川ハル研究会、2020年2月15日、東京）藤沢真理子「賀川ハルと関東大震災～村岡家との関係から～」

・Mariko Fujisawa “Haru Kagawa and Hanako Muraoka” 賀川記念館(神戸)、2014年
(<http://core100.net/eng/HaruandHanako.pdf>)

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況(学内外)

○所属学会

日本地域福祉学会、日本老年社会科学会、日本社会事業史学会、日本福祉教育・ボランティア学習学会

○自己評価

研究において「オンリーワンを一人にひとつ」を重視しており、防災福祉学の構築を目指し、研究活動を行っている。2019年度の研究活動としては、災害支援と地域福祉実践に取り組んだ賀川豊彦関係の論文を2本執筆した。賀川豊彦関連の論文は4本となり、現在5本目を執筆中である。これらの賀川豊彦関係の論文を読んだ主催者から、「第1回賀川ハル研究会」の招待講演の講師を依頼された。テーマは「賀川豊彦の妻ハルと関東大震災」である。賀川豊彦の災害支援は、大震災から100年たつ現在も事業が継続している点に特徴がある。また、賀川豊彦が提案したアイデアは、兵庫県知事が阪神淡路大震災の後に実現し、現在、日本の先駆的防災センターである「人と未来防災センター」の設立につながっている。今後30年以内に起こる確率が70~80%となった南海トラフ地震に備えるために、賀川豊彦の災害支援活動はさまざま示唆に富んでおり、次年度も論文を投稿していきたい。賀川豊彦関係の論文はすべて、神戸の賀川記念館や東京の松沢記念館へ贈呈しており、また本学学術情報センターの機関リポジトリで読むことができるので、2019年度に東京女子医大やイギリスのエジンバラ大学などから問い合わせがあった。

また、継続して行っている避難行動要支援者支援の研究では現地調査が重要であり、今年度発生した台風15号と台風19号で大きな被害を受けた千葉県や長野県の現地調査を行うとともに参与観察した。その結果を論文としてまとめる予定である。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

「オンリーワンを、一人に、ひとつ」、人間健康学部の学生たちが自分の長所や得意技を発見し、自分自身に自信をもつように、人間健康学部健康づくり指導者コース主任として、また地域連携センター副センター長として、大学の運営に取り組むことを目標とする。

(計画)

人間健康学部健康づくり指導者コース主任として、学生が自らオンリーワンであることを発見するために、授業や地域活動などさまざまな機会を提供するようプログラムを考える。とくに、学部のゼミナール報告会も学生が自信をもつ機会となるので、有効に活用する。また、地域連携センター副センター長として、地域連携センターが企画する地域連携活動報告会はコンテスト方式にしたことで盛り上がったので、次年度はさらに多くの学生が参加する方法を考える。

○学内委員等

地域連携委員会委員・地域連携センター副センター長

入試問題作成委員会委員

高大連携授業を担当

オープンキャンパス模擬授業を担当

○自己評価

人間健康学部教員としては、第一に2019年度から人間健康学部専門演習の形式が変更され、今ま

で各教員で行っていたゼミ活動がコース制となり、「健康づくり指導者コース」コース長として、前年度より準備をし、今年度スムーズにコース選択や希望教員選択ができるよう運営した。また、コース選択は昨年度後期の成績 GPA で配置されたので、学生たちが集中して勉強する様子が見られた。健康づくり指導者コースの GPA は平均より高く、目的意識をもつ学生も多いので、各教員による指導時間とともに、4 人のゲストスピーカー、①中国の高齢者問題、②がん専門看護師による講義、③認知症サポーター養成講座、④当事者（障害者）による講義など、学生からは「滅多に聞けない話を聞けて勉強になった、将来に役立つ」との感想だった。ゲストスピーカーについては大学ホームページに掲載するとともに、『地域と連携した活動報告書』にも掲載された。第二に、1 年生が大学生活を円滑に進められるように「基礎演習」の運営を昨年度に引き続き担当した。教科書を導入したこと、スポーツ大会を賞品方式にしたこと、プレゼンテーション発表時間を増やしインターアクティブな授業を行ったことなど、1 年生がこれから 4 年間の大学生活を積極的に行えるようなプログラムを工夫した。人間健康学部の教員として、担当科目や基礎演習や専門演習指導などで、学生がそれぞれのオンリーワンを発見できるように支援してきた。

地域連携センター副センター長としては、毎月コア会議を行い、委員会の内容を精緻化している。ATUCC としては、名東区区民祭りにおいて認知症サポーター養成講座と徘徊高齢者お帰り支援啓発事業を名東区社会福祉協議会と協働し開催した。藤沢ゼミの学生が徘徊高齢者お帰り支援啓発事業のボランティアとして活躍し、大学ホームページや『邦苑』に掲載された。また、今年度は地域連携センター主催「地域と連携した授業・活動報告会」の主担当であった。昨年度よりコンテスト形式に変え、今年度も大いに盛り上がった。昨年度見えにくい、採点しにくいという評価だったポスター発表を教育学部の協力により、教育学部卒業研究で使用しているボードを使い、多くの人がポスター発表を楽しめるように工夫した。また、昨年度は表彰状に教員名が書かれていたが、今年度は学生が主役となるように表彰方法や式次第の方法を工夫した。今年度は名東区役所や読谷村関係者や平和が丘学区の方が参加され、より地域と連携したイベントとなった。

入試問題作成委員会委員として、一年間忙しく活動した。詳しい活動内容は入試に関係することであり控える。

2019 年度の高大連携授業の講師を担当した。東邦高校との高大連携授業（2 月 12 日）では、1 年生 4 人、2 年生 13 人に対して、防災ゲームを使い、今後 30 年以内に起こる確率が 70～80%である南海トラフ地震に備えるための授業を行った。高校生や授業参観してくれた教員からは「とても役立つ。もっと防災について知りたい」という感想であった。

2019 年度オープンキャンパスでは、8 月 23 日模擬授業「災害をイメージし、防災につなげよう」というテーマで実施した。参加者からは「すごくわかった」87.5%と高い評価であった。次年度も参加者の興味関心に合わせた模擬授業を展開したい。

IV 社会貢献

○目標・計画

（目標）

地域に信頼される人材の育成のために、地域における防災の普及啓発に取り組む目標をもつ。

（計画）

2018 年度に実施したママのための防災カフェは好評であったので、これを継続する。そして、2018 年度から、名東区役所、名東区社会福祉協議会、名東区災害ボランティアの会とともに、多くの防災イベントを実施しているが、次年度も一人でも多くの方に防災について知識や技術を伝え、今後 30 年以内に 70～80%の確率で起こると言われている南海トラフ地震に備えてもらうよ

う、地域に貢献する。

○学会活動等

○地域連携・社会貢献等

①認知症サポーター養成講座

・5月12日名東区民祭りにおいて、名東区社会福祉協議会と連携して、認知症サポーター養成講座と徘徊高齢者お帰り支援事業を行い、藤沢ゼミ4年生が徘徊高齢者お帰り支援事業の啓発普及ボランティアとして活躍し、大学ホームページや『邦苑』に掲載された。100組以上の親子が徘徊高齢者お帰り支援事業に参加してくれ、行列ができるほどであった。この事業の目的は30代40代という忙しい世代に認知症の事を理解してもらい、また子どもたちが認知症高齢者の対応方法を理解するものであった。参加者は楽しみながら認知症への理解を深める機会となった。

・10月29日認知症サポーター養成講座を実施した。健康づくり指導者コース学生が受講し、新しく認知症サポーター24人が誕生したことが大学ホームページと『地域と連携した活動報告書』に掲載された。講師に特に依頼したことは、学生たちがコンビニエンスストアなどでアルバイトをしている時に認知症高齢者の方が来られた時の対応練習である。ロールプレイの時間を十分に取ってくださり、学生たちからとても実践的だったと満足度が高かった。

○自己評価

5月の名東区民祭りで地域連携センター主催のコミュニティカレッジとして、名東区役所や名東区社会福祉協議会などと連携して認知症サポーター養成講座と徘徊高齢者お帰り支援事業を実施した。多くの区民や学生が参加し、認知症理解の普及啓発事業となった。次年度も名東区民祭りで徘徊高齢者お帰り支援事業を名東区社協と連携して実施する予定である。また、健康づくり指導者コースで企画した認知症サポーター養成講座も好評であったので、次年度も継続していきたい。

②ぼうさいこくたい学生ボランティア

2019年10月19日～20日名古屋市でぼうさいこくたいが開催された。日本の防災関係者や機関や団体や企業が一堂に集まるイベントである。以前から名古屋市危機管理局職員と学生ボランティアについて話し合っており、名古屋市からボランティア募集の依頼がきた。今回、地域防災コースを希望している1年生2人がボランティアとして参加した。

○自己評価

1年生はまだコースに分かれていないので、どの学生が地域防災コースを希望しているのかわからず声掛けが難しかった。今回地域防災コースを目指している2名の学生が手を上げてくれ、ボランティア活動を頑張ってくれた。最先端の防災イベントに学生は目を輝かせ、進路を考える機会になったようである。

③防災講座

2019年10月10日、教育学部教員とともに親子ミニ防災教室を行った。参加者は大人3名、乳幼児5名であった。ちょうど台風19号が近づいた時期であり、台風について理解を深めてもらうとともに、今後30年以内に起こる確率が70～80%である南海トラフ地震が起きても子どもの命を守るためには備えが重要であることをママたちに学んでもらった。満足度が高く、帰ったら台風に備えますとの感想であった。

○自己評価

小さな子どもを持つ母親たちが台風や南海トラフ地震のことを心配しているが、何から手を付けていけばいいのかわからないという声があり、それに応える目的で、親子ミニ防災教室を実施した。

時間が短かったが、台風 19 号が近づいており、有効な講座となった。次年度も、さらに一人でも多くの親子に防災の知識を伝えていきたい。

④災害ボランティア（防災士）

2019 年度災害ボランティア（防災士）として、以下の通り活動した。

・5月26日（日）名古屋市総合水防訓練。昨年度と同様に、名東区役所や名東区社会福祉協議会やめいとう災害ボランティアの会とともに活動した。前山小学校において開催された。参加者に豪雨の際どのように避難するか体験訓練してもらった。

・9月26（木）～28日（土）台風15号の暴風によって大きな被害が出た千葉県館山市と南房総市の現地調査とともに参与観察した。暴風によって屋根が飛ばされたのでブルーシート張りが急務であるが、高所作業であり資格をもつ専門職ボランティアが必要であった。

・10月26（土）～27（日）台風19号により大規模な浸水が起こった長野県長野市の現地調査を実施する。信州リンゴ発祥の地である長野市長沼地区赤沼サテライトの状況を把握するとともに参与観察した。

・11月7日（木）～8日（金）台風19号により大規模な浸水が起こった長野市長沼地区りんごの郷サテライトを現地調査するとともに参与観察した。リンゴ園が広がっている地域であり、決壊した千曲川の堤防近くであるため、浸水スピードが速く土砂の堆積が厚かった。

・11月16日（土）名東区ボランティア展 in 藤が丘。会場は地下鉄藤が丘駅広場で、名東区内のボランティア団体とともに参加した。災害時に必要なトイレの備えについてステージで話した。その様子が「名東ホームニュース」に掲載された。

・11月21日（木）～22日（金）台風19号により大規模な浸水が起こり、長野市では8000haのりんご園に被害がでている。そのため、JAながのが農業ボランティアを募集した。JAながのを現地調査するとともに参与観察した。

・2020年1月17日（金）名東区災害ボランティアセンター立ち上げ訓練。会場は名東区社会福祉協議会で、シュミレーション方式で災害ボランティアセンター立ち上げ訓練を行った。想定場所は引山小学校であるが、シュミレーションによって想定以上の被害が起こる可能性が浮かび上がってきた。防災士として課題を指摘し助言した。

・2020年2月8日（土）名古屋市災害ボランティアコーディネーターのフォローアップ講座。名古屋市災害ボランティアコーディネーターとして登録しているが、災害時、災害ボランティアセンター開設とともに災害ボランティアコーディネーターとして運営にあたることができるように備えている。大学地域連携センター副センター長として名古屋市市民協働センターやNPO関係者に挨拶した。

○自己評価

今年度は名東区役所、名東区社会福祉協議会、名東区災害ボランティアの会とともに、多くの防災イベントを開催した。また、今年度は大規模な災害が続き、千葉県館山市社会福祉協議会災害ボランティアセンター、千葉県南房総市社会福祉協議会災害ボランティアセンター、長野市社会福祉協議会災害ボランティアセンターの職員と学生が災害ボランティアに参加する方法について話し合った。長野市ではリンゴ園の浸水により通常の災害ボランティアセンターとは別に、JAながのが農業ボランティアを募集した。通常の社会福祉協議会災害ボランティアセンターとの比較研究を行った。来年度も多くの災害が起こる可能性があり、災害ボランティアの普及啓発を行っていきたい。

VI 総括

教育活動については、愛知東邦大学で勤務して3年目となり、学生の興味関心を把握できるようになってきたので、学生のニーズに合わせた授業展開が行えるようになり、満足度90%以上という結果であった。学生からは将来に役立つという評価が多かった。特に、防災の授業「人間と地域」では3年間で約300人の学生に防災を考えてもらう機会を提供できた。最初、興味がないと言っていた学生たちが、防災を自分の問題として取り組み始める姿は頼もしいものであった。来年度は学生たちが地域の人たちとともに活動できるような機会を提供していきたいと考えている。また、ゼミの学生が防災士試験にチャレンジしたり、試験を受けなかった学生たちも積極的に防災に取り組むようになってきた。グループワークを多く取り入れたことで、グループダイナミクスの効果があり、学生たちが主体的に学習するようになってきた。2019年度ゼミナール発表会ではゼミ代表が防災について報告し、ほかのゼミの学生や教員から良い勉強になったと感想をもらった。

研究活動では、災害支援と地域福祉実践を行った賀川豊彦の論文を2本報告した。論文「賀川豊彦と東京帝国大学セツルメント」では、賀川豊彦の取り組みを東京帝国大学セツルメントと比較研究することで100年近く続く賀川の復興支援の特徴がより明確となった。また論文「賀川豊彦とコープこうべ」では阪神淡路大震災の時に「生協の父」と言われる賀川豊彦の言葉を原点として支援活動にあたったコープこうべに焦点を当てた。賀川豊彦関係の論文は4本となり、すべて神戸の賀川記念館と東京の松沢記念館に贈呈している。また、本学学術情報センターの機関リポジトリで論文を読んだ東京女子医大やイギリスのエジンバラ大学などから問い合わせがあり、それがきっかけで第1回賀川ハル研究会の招待講演講師の依頼につながった。

社会貢献活動については、昨年度に引き続き、名東区役所や名東区社会福祉協議会やめいとう災害ボランティアの会とともに多くの防災イベントを実施し、子どもからお年寄りまで幅広い世代へ防災教育できたことに意義があった。また、2019年度はミニ親子防災教室を開いたり、高大連携授業やオープンキャンパス模擬授業において防災の授業を行った。いずれも「役立つ。防災についてもっと知りたい」など高い評価を受けた。本年度は台風の被害が各地で起こり、台風15号では暴風により千葉県が、台風19号では豪雨により長野県が大きな被害を受け、これらの地域を現地調査するとともに参与観察を行った。次年度もさまざまな災害が起こる可能性があり、一人でも多くの人に防災・減災の知識と技術を普及啓発していきたい。

以上